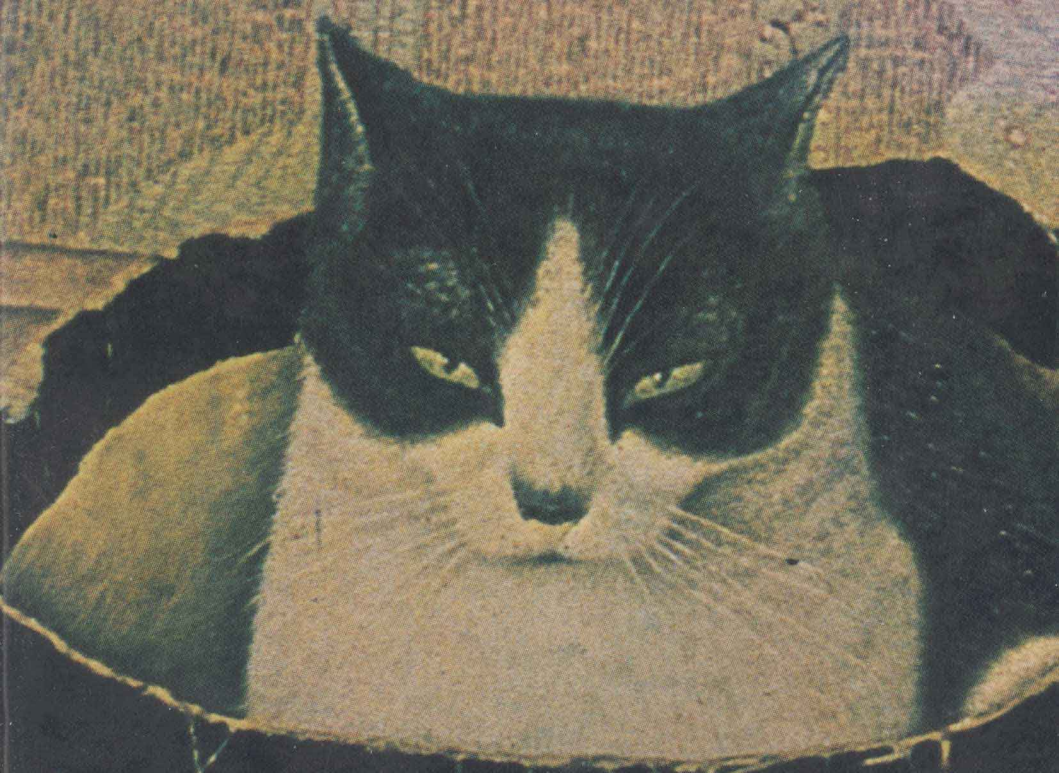




猫文学大全

柳瀬尚紀編訳

THE BOOK OF CATS

Edited by

George Macbeth and Martin Booth

Selection of Works Copyright © George MacBeth, 1976

Japanese translation rights arranged with
Martin Secker & Warburg Ltd., London
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo



猫文学大全

一九八〇年 七月二〇日 第一刷発行
一九八〇年 一〇月二五日 第二刷発行

著者——ジャン・ポール・サルトル 他

編訳者——柳瀬尚紀 ©1988

発行者——大和岩雄

発行所——大和書房

住所——東京都文京区関口一—三三

電話——(二〇三)四五一一

振替——東京六一六四二二七

印刷所——凸版印刷

製本所——ナショナル製本

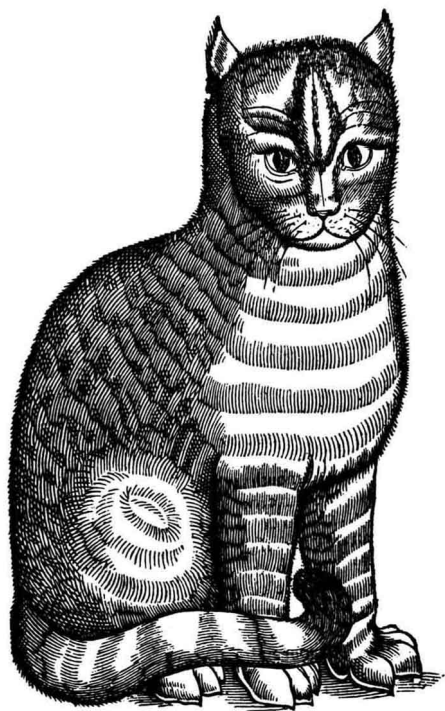
装幀者——高麗隆彦

コード番号——1397-860050-4406



猫文学大全

柳瀬尚紀編訳



大和書房

猫文学大全



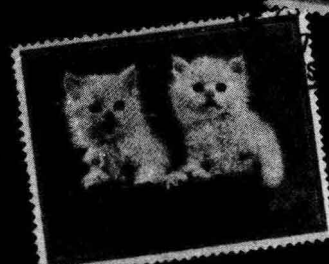
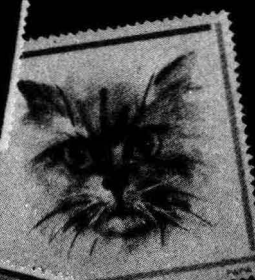
猫文学大全 目次

子猫 オグデン・ナッシュ 7

ネコ君の職探し テッド・ヒューズ 8

猫の教訓 オールダス・ハックスレー 16

ウェブスターの物語 P.C. ウッドハウス 26



矮小なる獅子、或は猫 ウィリアム・サーモン 59

白猫 W.W. ジェイコブス 65

動物園にて マーク・トウェイン 84

嫉妬ぶかい猫 ジャイルズ・ゴードン 86



ひとり歩く猫

ラドヤード・キプリング

102

そこで何してきたの？

ハーヴィー・ジェイコブス

117

トバモリー

サキ

131

まずいと思ったらもづくろい

ポール・ギヤリコ

143

猫の古星術

アンカーラー

163

猫とバイオリン

ロイ・ラフラー

169

自由への道

ジャン・ポール・サルトル

186

アコの猫

稲川方人

201

訳者あとがき

205

子猫

The Kitten

子猫の厄介なのは
つまり

結局その子が

おとな猫になること

オグデン・ナッシュ

Ogden Nash



Prince Edward, Martin Leman (Private Collection)

ネコ君の職探し

How the Cat Became



テッド・ヒューズ

Ted Hughes

世の中たいへんうまいぐあいに動いていて、たいていの生きものがそれなりに至極満ち足りていた頃の話。大将ライオンはすでに有名だった。トガリネズミ一家やモグラ一家やクモ一家のちよろちよろした連中だつて、けっこう顔を知られていたのである。

ところがこうしたみんな忙しい生きもののなかに、さっぱりうだつが上がないみたいなのがいた。それがネコ君である。

ネコ君はまったくもって変りものだった。ほかの者たちは、この変りものをどう解してよいやらてんでわからないのだった。

ネコ君は、森のとある立木の虚に住んでいた。夜な夜な、ほかの生きものたちが寝静まった頃、彼は立木

の奥ふかくにひきこもる——と、それからが大騒音、キーキーギーギー、キャーキャーギーギャー、すさまじいのなんの！ 同じ立木の枝の虚で日がな一日さかさまになって眠りこけていたコーモリ一家の者たちは、すったまげて目をさまし、翼の先っぽで耳に栓して逃げまどった。彼らにしてみれば、ネコ君が最悪の悪夢にうなされていると思つたらう——それも一度に十もの悪夢にだ。

ところが大違い。ネコ君はバイオリンを奏でているのだった。

いやはや、あれはなんとも見ものだった。暖かくすべすべした虚にまるくなり、穴から幹のてっぺんをじつと見あげ、星にほほえんでみせたり、月にウインクしてみたり——それでバイオリンはしつかと顎で押えている。ああ、ネコ君は果報者だったのだ。

こうして一晩中、彼はギーギーと作曲に取り組んでいた。

さて、ほかの連中はこれがちつとも気に入らない。あいつの音楽は何の役にも立ちはない、腹の足しになりはしない、それで巢ができあがるわけでもない、そもそもそれであいつが暖まるわけではないじゃないか。そのうえネコ君が一日中のらくら暮らしで、陽だまりで眠りこけているなんてのは、ちよいと我慢がならなかった。

「ありや悪い見本だ」ビーバーのおっさんがいった。「仕事らしい仕事をひとつもやらん！ わしらの子供らがあんなふうのうのう暮せるつもりになったら、いったいどうなるかね？」

「そろそろネコのやつも」とイタチのだんながいった。「職をもつていい時分だべ、世の中誰もかれもそうなんだからな」

そこで森の者たちは、ネコ君に就職を勧告する委員会を結成した。

カケスのおやじ、カササギのあるじ、オウムのとつあんが、夜の明けるのを待って出かけていき、ネコ君の古木のとっぺんの小枝にとまった。ネコ君が首を突き出したとたん、三者はすかさず声をそろえておっ

はじめた。「おまえさん、仕事をもつんだな。仕事をもて！ 仕事をもて！」

これはまだまだ序の口だった。一日中、ネコ君がどこへいこうと、この鳥たちはせつついて離れない。「仕事をもて！ 仕事をもて！」

これではネコ君、どう頑張ったところで、ついに一睡もできなかった。

その夜、彼は早めにいつもの木へ戻った。なにしろくたくたで、バイオリンのお稽古どころではなく、じきにぐっすり眠ってしまった。翌朝、一番の光で木から首を突き出すと、委員会の三羽がまたしても待ちかまえていて、相変らず声高におっぱじめるではないか。「仕事をもて！」

ネコ君、さつとばかり木の奥に引込んで、考えはじめた。みんなのいうなりになって、じめじめする森のなかで朝から晩まで土を掘りはじめるなんて気はない。とんでもないこつた。そんなことをしたら、バイオリンを弾くひまもなくなってしまう。すべきことはたつたひとつしかない、それを実行するまでだ。

彼はバイオリンを小脇にかかえ、いきなり木のとっぺんから飛び出すと、一気に森を駆け抜けた。遅れじと、声張りあげながら後を追ったのは、カケスのおやじ、カササギのあるじ、オウムのとつとつあんである。

下生えのなかで一日の仕事に取りかかろうとしていた者たちは、ネコ君が走り抜けるのをいったまげて見たものだ。ネコ君が走るなんて光景を見た者はなかったのである。

「ネコのやつ、どうかしたぞ」みんなが声をかけあった。「いよいよもって職に就く気らしいな」

シカ、イノシシ、クマ、ケナガイタチ、マングース、ヤマアラシといった面々、さらには鳥たちの一群が、ネコ君の行先を見届けようと先をあらそった。

走りに走ったあけく、彼らは森のすれにやってきた。そこでみんな立ち止まった。葉のすきまからのぞき見ては、たがいに顔を見あわせ、からだをぶるぶるわせたのである。行手には、干草の山のちらばる畑をへだてて、ニンゲンの農家があるではないか。

Quia prosperit de celo!
sancto suos dominus de ce
lo in terram asperit. ■



Harleian manuscript (British Library, London)

ところがネコ君は恐れなかった。彼はまっしぐらに進み、畑を通り越え、ニンゲンの戸口へたどり着いた。そして前足を一本ひよいともちあげ、扉の真ん中を思いきり叩いたのだ。

ニンゲンはネコ君を見てびっくり仰天、最初は目をパチクリ、口をアングリ、ただ突っ立っているだけだった。これまでどんな生きものも畑へやってきたことはないし、いわんや戸を叩くなどということはないのだ。ネコ君がまず口をきいた。

「職探しにきたんですけど」彼はいった。

「職だって？」ニンゲンは耳を疑った。

「仕事です」ネコ君はいった。「食いぶちを稼きたいんです」

ニンゲンは彼を頭から爪先まで眺め、それからその長い爪に目をとめた。

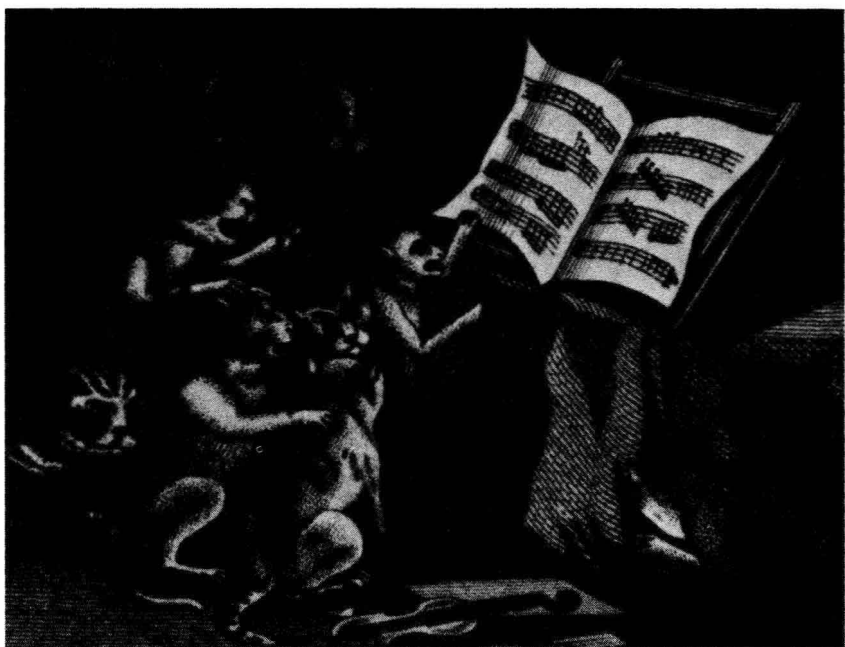
「ネズミ捕りの名手になりそうじゃないか」ニンゲンはいった。

ネコ君はこれを聞いて驚いた。いったいどこがネズミ捕りの名手になりそうに見えるのか不思議だったのだ。それでも就職の機会をフイにする気はなかった。そこで彼は胸を張っていった。「それならずいぶん前からやってます」

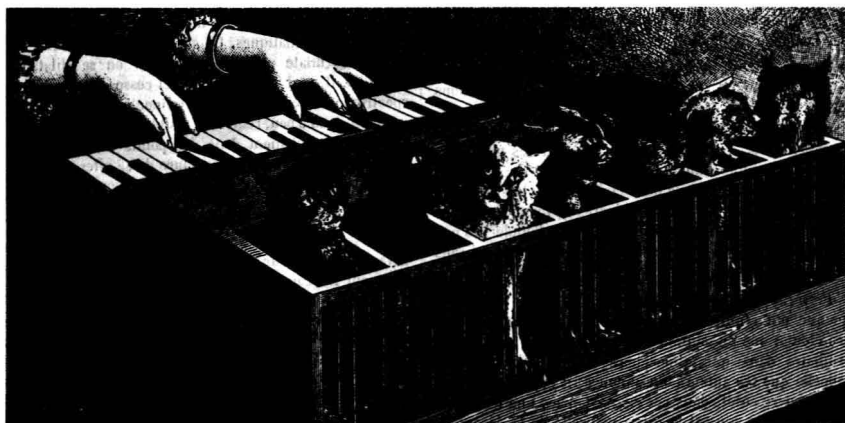
「よし、そういうことなら仕事をやろう」ニンゲンはいった。「うちの農場にはドブネズミやハツカネズミがわんさといるんでね。干草の山のなかにはいるし、とうもろこしの袋のなかにはいるし、食料庫にはうようよしている」

こうしてネコ君、何が何だかわからないうちに、へドブネズミおよびハツカネズミ捕りとして契約をさせられてしまった。報酬はミルク、肉、炉辺の一角である。日中は寝て、夜通しの勤務である。

最初、彼はおそろしく痛めつけられた。ドブネズミどもには尻尾を引っ張られ、ハツカネズミどもには耳をかじられた。彼の頭上の垂木に這いのぼつては飛びおりて——ドスン！ とばかり闇にまぎれて襲いかか



The Cats' Concert (British Library, London)



A Cat Piano, 1883

つてきた。なぶりものにして寿命をちぢめるのだった。

しかしネコ君はのみ込みが早かった。一週間後、彼はドブネズミ一ダースと、その倍数のハツカネズミを、半時間たらずで退治できるようになった。徹夜でこのまま退治していけば、じきに一匹も残らなくなるから、ネコ君、失業の憂目にあいかねない。そこで彼は一晚に数匹だけ捕えることにした——最初の十分ばかりで片付くのだ。あとは納屋に引きあげて、朝までバイオリンを弾く。これこそ彼の探し求めた仕事だった。

ニンゲンは彼にご満悦だった。そしてニンゲンの妻君は、彼のことを可愛らしいと思った。妻君は彼を膝にのせ、何時間でも撫でてくれるではないか。なんという生活だ！ネコ君は思った。しずくのしたたり落ちてくるあの湿っぽい森にいる愚かな連中に、いまの自分を見せてやりたいくらいだ！

さて、ほかの農場主たちがネコ君のドブネズミおよびハツカネズミ捕りの腕前を知ると、みんなネコ君の同類をほしがった。そのうちにぞろぞろとネコ君の同類がふえたので、われらがネコ君は弾薬隊を結成することに決めた。そうそう、ネコ君の同類は誰もかれもバイオリンの名手だったのだ。夜な夜な、ドブネズミをひと山、ハツカネズミをひと山こしらえたあと、どのネコもめいめいの農場を出て、畑をいくつも越えては、小さな暗い林にやってくるようになった。

それからがすさまじい調べだ！一晩中ひっきりなしに……

やがてネコのレディたちもやってくるようになった。そこで夜な夜な、音楽ばかりか、ダンスのはじまりと相成った。それがまたすさまじいダンス！忍び足でそこへいって、木陰から原っぱをそつとのぞくと、ネコたちのダンスが見られるのだ——つややかな毛皮をまとったレディたち、そしてオスネコたち、真珠みたいなグレーのがいる、赤茶けたのがいる、どれもこれも緑色に輝くすばらしい目をしている。空地のあっちこっち、音楽が夜どおし鳴りやまない。

夜が明けると、彼らはバイオリンを落葉松にひっかけて、それぞれの農場へ一目散に舞い戻り、いかにも

夜どおしネズミどもを相手に一働きしてきたような顔をした。腹がへったとばかりにミルクをなめ、炉辺でながながとからだを伸ばし、にんまりと笑顔を浮べて寝入るのだった。